

令和元年度2学期終業式 校長式辞（12月24日）

今日で令和元年度の2学期が終了します。皆さんは、長いこの2学期、どのように成長したでしょうか。皆さんは、この岡山朝日高校で過ごす日々の中で、一人ひとりのあり方は異なりますが、必ず、学力も人間力も成長しています。

このことは、在校生の皆さんと接することや、卒業生と話をさせていただく中で実感しています。

例えば、11月に145周年記念講演を東京大学の榎原雅治教授に「1000年は長いか」と題して行っていただきました。講演終了後に10数名の生徒が残って、榎原先生と座談会をした時のことです。

生徒の質問の一つに、「研究者としてやっていくことができるポイントは何か」ということがありました。榎原先生の答えは、①忍耐力や几帳面さがあること、②謙虚さがあること、③自分が何を知りたいかが明確であること、④いろいろな人と交流・協力ができること、というものでした。

このことは、勉強にも、学問にも、仕事にも共通するものであると思います。特に③と④は、知識を価値づける力や人間関係形成能力に繋がるものであり、これからの社会で、AIに負けない人間の強みと言えると思います。

私は、特に、④の力をつける方法が気になって、座談会終了後、榎原先生に、「どこでこの力を育んだのか」を聞きました。先生の答えは、朝日高校での体験が出発点であり、朝日では、自分を受け入れてくれる友人ができ、体育祭の仮装行列では、他の人と関わり合いながら課題解決に向けて取り組む経験をするのができたとのことでした。

また、生徒の別の質問には、「研究者になるという進路決定で悩んだことがあったか」というものがあり、先生は、大学での卒論作成や大学院での研究の時に、自分の力でやっていけるのかについて非常に悩んだ。しかし、同じことで悩む友人としっかり会話し、励まし合ったり、課題を明確化したりすることや、ただ悩むことのみにとらわれるので

はなく、その場その場で出来ることを形にしていったと答えられました。このことは、近年話題となっているデザイン思考にも繋がるように感じました。

中身に違いはあるかもしれませんが、皆さんも、このような日々を、朝日で送っているのではないのでしょうか。「自らを信じて」、「どっしり、がっつり、続ける、繋げる」等の言葉で励まされながら。

もう一つ、座談会での生徒の質問を紹介します。「1000年、変わらないものは何ですか」という質問です。先生の答えは、親から子へ、子から親へなど、家族に対する思いは、1000年続いているというものでした。座談会終了後、私は、先生に、「なぜ、そのことが分かるのか」を聞き、手紙から分かること、どの階層が書いた手紙からも、どの時代の手紙からも共通して読み取れるものであることを教えていただきました。この時、先生が講演で、歴史を学ぶ理由の一つとして挙げられた、過去の時間に共感し、そのことが、未来の時間に共感することに繋がるということが腑に落ちました。

高校生として過ごす、年末年始は、社会人として過ごす年末年始に繋がっています。高い志を持って社会に貢献し、社会で生き抜いていくために、一人ひとりにとっての充実した冬休みを過ごし、それぞれのあり方で成長することを期待して、終業式の式辞とします。

(県立岡山朝日高等学校 校長 竹田義宣)